

- 季節の花：こぶし・スイトピー
- コラム：植物の目・光周性
- 情報：花のイベント

ふらっとふらわーず ニュース

- 発行：ふらっとふらわーず
- 2015 春号：第10号
- 連絡先：042-682-2835
- 編集委員：内田信子

季節の花

★【こぶし】 モクレン科
モクレン属

「田打ち桜」「種時桜」「田植桜」とも呼ばれ、春を告げる花です。「田打ち」とは、田植えの準備のため、田を耕す事で、種まきを始める時期を知らせるなどの、「自然暦」として農耕のために利用されてきました。ただし、地方によって時期が違いため「田打ち桜」は「糸桜」(シタシザクラ)の事を指す地方もあるそうです。このように古くから日本全国に自生しているため、この花を見ると、郷愁にかられる方も多いのではないでしょうか。3月下旬頃、葉が出てくる前に、6枚の花びらをもった大きくて白い花を木いっぱい咲かせ、高さは大きくなると20mにも達します。名前の由来は、つぼみの形が握り拳に似ているからだとか、花後にできる果実が握り拳のようにほこぼしとした形をしているからだとか言われています。日本では「辛夷」と書いて「コフシ」と読みます。中国ではモクレン類のつぼみを乾燥させたものを辛夷(しんい)と呼び、薬用に使っていました。日本には元々モクレンがなく、代用としてコフシのつぼみを使ったことから、辛夷はコフシのことを指すようになったようです。現在も漢方薬で鼻炎や蓄膿症などの治療に用いられています。同じモクレンの仲間で、庭木としても栽培されるハクモクレンよりもコフシの方が花が小さく、開花時に花の下に小さな葉がつくので簡単に区別することができます。近年使われる「マグノリア」は、モクレンの仲間を意味する学名(Magnolia)で、数々の園芸品種が導入されるにつれ、日本産のコフシ、中国産のモクレン、ヒマラヤ地域のキャンベリ、北米のキモクレンなどを交配させて生まれた園芸品種を「マグノリア」と総称しています。



とこぶし、こぶしのつぼみの先端がどこを向いているかご覧になったことはありませんか？葉やつぼみが南北の方向に出る植物を方向指標植物(コンパス植物)と言いますが、太陽の光を受けるつぼみの南側の部分がくらみ、その反動でつぼみの先端がほとんど北に向きます。(環境によって変わることがある)こぶしもこの方向指標植物に入ります。つぼみがくらみこんできた時期に、是非観察してみたいものです。

花言葉

「友情」「歓迎」「信頼」(花言葉事典より)
(参考：趣味の園芸、ヤサシイエンゲイ、おれぎこ)

★【スイトピー】 マメ科 レンリソウ属 (ラティルス属)

17世紀末頃にイタリア・シシリー島で発見されイギリスに渡り、その後ヨーロッパ各地で改良が進み多種多様な園芸品種が生まれ、現在に至ります。日本への来歴は不明ですが、19世紀後半にスイトピーが描かれた写真図が残っているため、それ以前に入ってきていたと思われる。シャロワレンソウ(麝香連理草)の和名があります。茎は自立せず、巻きひげを他のものにからませながら上に伸びていき、大きくなる品種は3mの長さにも達します。開花時期によって、「春咲き系」「夏咲き系」「冬咲き系」に分けられ、くるにならぬものは「矮性系」として区別されます。色は、ピンク・紫・白が基本で自然色、その他は着色しています。着色方法は、白系のスイトピーに、着色したい色のお水にしばらく浸けておく、綺麗に着色されます。現時点で24種類以上の色があります。



栽培環境：連作を嫌うので、昨年マメ科植物を植えていない場所を選び、日当たりと風通し、水はけのよい場所で育てます。水やり：乾かし気味に管理し、土の表面がよく乾いたらたっぷりの水やり。
肥料：元肥として緩効性化成肥料、追肥は月1回程度を置き肥。ともにチッ素分が少ない肥料を一般的な草花の半分くらいに。
ふやし方：タネでふやします。花後、サヤエンドウのような果実が茶色くなったらタネをとり、乾燥貯蔵して、秋にまきます。花がら摘み：花色があとできたら、花柄のつけ根から折り取り摘み：発芽後、茎が7〜8節伸びたら摘み。

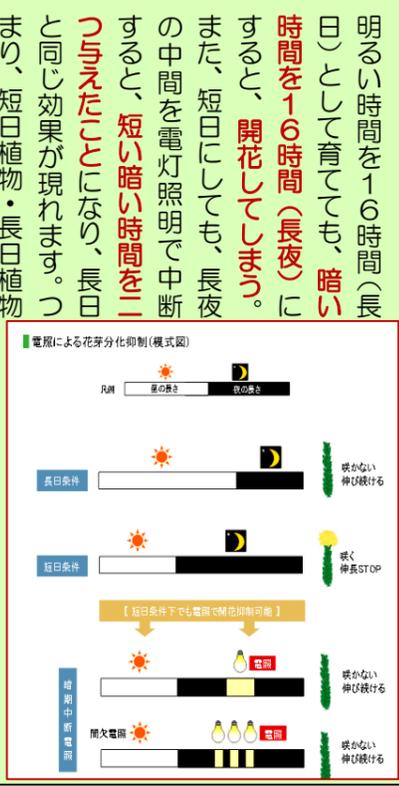
育て方

「門出」「優しい思い出」「永遠の喜び」(花言葉辞典より)
(参考：趣味の園芸、ヤサシイエンゲイ、佐伯市スグレモノ情報館)

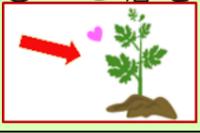
コラム

植物の目 光周性

生物が昼と夜の長さの関係から季節を認識し、それに反応する現象を光周性(こうしゅうせい)といいます。このコラムでも「日長(にちちやう)」「長日(ちやうじつ)植物」「短日(たんじつ)植物」などが登場しましたが、「日長」とは日照時間の事。「長日植物」は日長が長いときに開花する植物で、草花ではアブラナ、カーネーションなどはよく知られています。「短日植物」は日長が短いときに開花する植物で、「コスモスやキク、前回冬号のポインセチアも短日植物です。また、植物の中には日長に関係なく花芽を形成するものもあり、「中性植物」といって、アモクロコシヤエンドウがそうです。



明るい時間を16時間(長日)として育てても、暗い時間を16時間(長夜)にすると、開花してしまふ。また、短日にしても、長夜の中間を電灯照明で中断すると、短い暗い時間を二つ与えたことになり、長日と同じ効果が現れます。つまり、短日植物・長日植物は、正確にはそれぞれ「長夜植物」「短夜植物」とした方が適切かもしれません。人間にとっては夜の長さは分かりにくいので、風間の長さを基準にして日長、短日、長日と呼んでいるのです。多くの植物がそれぞれ決まった時期に花を咲かせるのは、1日の風間(夜間)の長さを覚えているからです。植物がそれぞれの特性にあった季節に開花することは子孫を確保する上で不可欠であるのですが、いったいどうやって日の長さを計っているのでしょうか。植物が日長の変化を感知する機構は敏感で、多くの植物は暗期(明期)の長さを30分程度の差があれば敏感に反応するといえます。ヒトは、目の視細胞に存在するタンパク質等で見ることが出来ます。同じエネルギーの光なら、明所では緑色光を最も明るく感じます。植物の例えばキクは、主に葉の細胞中に存在する色素タンパク質で光の信号を受け取ります。利用する光もヒトの可視光線よりやや広い範囲です。この色素タンパク質が「フィトクロム」と呼ばれ、花芽分化抑制に効果的な赤色領域の光を高感度で感じます。その後、開花促進物質(フロリゲン)と開花抑制物質(アンチフロリゲン)の両方の作る量を調節して、茎先端部までやってきた、促進あるいは抑制物質の量によって開花するかどうかを決めています。このような複雑で繊細な植物の特性を活かし、夜間温室内の照明等により日長を調節することで、花や野菜の季節はずれの出荷が可能になります。(参考：おれぎこ、趣味の園芸、エンゲイナリ、花き研究所)



情報

花のイベント

- フラワーフェスティバル2015
3月21日(土)・5月24日(日) 国営昭和記念公園
- 第25回2015 日本フラワー&ガーデンショウ
4月10日(金)〜12日(日) 幕張メッセ国際展示場
- 第17回フラワーフェスティバル由木
4月25日(土)・26日(日) 巨南大沢駅周辺
- 塩船観音つつじまつり
4月中旬〜5月上旬(日) 塩船観音寺